

看護学生の国際交流に関する意識調査

濱畑 章子¹, 片岡由美子², 米田 雅彦³, 平井さよ子⁴, 古田加代子⁵, 原沢 優子¹, 星野 純子¹

Nursing Students' Views on International Exchanges

Akiko Hamahata¹, Yumiko Kataoka², Masahiko Yoneda³, Sayoko Hirai⁴,
Kayoko Furuta⁵, Yuko Harasawa¹, Junko Hoshino¹

キーワード：国際交流，看護学生，意識調査，学生ニーズ，海外研修

はじめに

大学基準協会は看護学学士課程卒業生の到達目標に柔軟性と国際性をあげ、「知的好奇心や広い視野をもって、排他性・閉鎖性に気づき多様化された価値観を認識する能力を身につける」と提示している¹⁾。学生が将来、看護専門職として活躍するためには、海外を視野に入れた幅広い物の考え方、とらえ方が求められている。

日本の看護系大学を対象にした国際交流に関する調査では、国際交流を担当する公式な組織を設置している大学が多くみられる²⁾。このように、国際交流を進めることは看護教育を発展させる上で不可欠になってきている。実際にカリキュラムの中に国際保健や国際看護などを取り入れたり、姉妹校や交流協定先の大学で特別な科目の単位習得を可能にしている大学も増えつつある。しかし、大半は短期の学生研修という名目で、欧米を中心とした大学で講義の聴講や、大学教育設備の見学、看護関連施設の訪問など異文化体験をさせる内容にとどまっている³⁾。

当大学では平成12年3月から2週間の米国大学への学生研修を毎年、実施している。20名前後の学生が私費で参加するが、ほとんどの学生が参加後満足したという感想をよせている。特に、研修に対してモチベーションの高い学生は帰国後、看護学の勉学意欲を高めている。しかし、研修に参加する学生は限られている。研修に参加しない学生も含めて、学生がどのように国際交流を考え

ているのか把握し、国際交流を推進するための学内の環境作りを考えていくことが今後の課題であると考え。そのための資料作成を目的として、本学の看護学生を対象とする国際交流に関する調査を行った。

目的

本学看護学生の国際交流に関する意識を明らかにして、国際交流を推進するための学内における環境作りの資料とする。

研究方法

対象は愛知県立看護大学1年生から4年生までの学部学生、345名であった。調査内容は海外留学や研修の経験、国際交流活動、英語教育への関心などについて16項目の自記式質問紙を使用して調査した。学生に直接、調査について説明し、匿名性やプライバシー保護、調査後のデータ破棄など倫理的配慮を明記した依頼用紙や回答用の厳封可能な封筒を同封し、手渡した。調査後、その場で回収した。分析は記述統計で処理した。

調査期間：平成16年7月1日—7月31日

結果

対象者の概要

調査に回答したのは、女性317名(96.1%)、男性13名

¹愛知県立看護大学(老年看護学)，²愛知県立看護大学(英語)，³愛知県立看護大学(栄養代謝学)，⁴愛知県立看護大学(看護教育・管理学)，⁵愛知県立看護大学(地域看護学)

(3.9%)の総計330名で、回収率は95.7%であった。入学形態は推薦・前期・後期が297名(90.0%)、編入生15名(4.5%)、社会人18名(5.5%)であった。

1. 海外へ出かけた経験

これまで海外へ出かけた経験の有無を尋ねると、「出かけた経験がある」が47.9%で、「経験が無い」が52.1%であった。このように、ほぼ半分の学生は海外体験をしていた。体験の内容をみると、「旅行」が65%で一番多く、次に「研修」が16%であった。短期語学研修を含む「留学」も12%で、その国に居住していた者も5%みられた(図1)。また、出かけたことのある国をみると、主に米国とアジアであり、それぞれ、35%、32%であった(図2)。

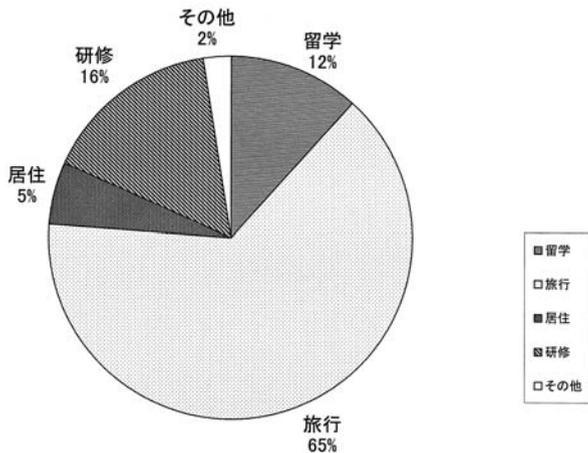


図1 海外体験の種類

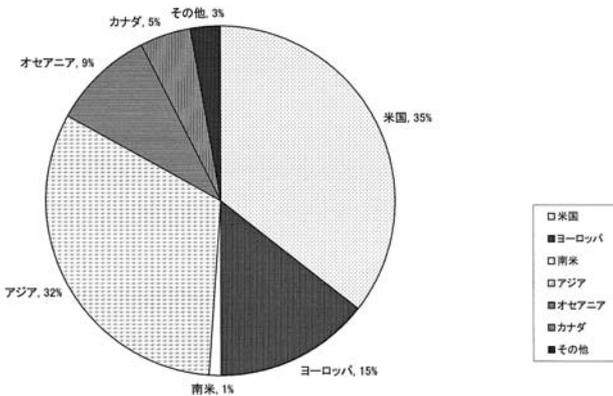


図2 海外体験した国

2. 留学への関心、外国語学習

将来、留学を希望するかを尋ねると、「希望する」が33%、「希望しない」が32%、「わからない」34%で、全体に3つの意見に分かれていた。以上のことから、現時点でどちらとも言えない状況がうかがえた。留学を希望する者111名に目的を尋ねると、「語学の勉強」が48%を占めていたが、「看護の専門的な勉強」と「看護師免許の取得」を目的とする者も合わせて38%を占め、留学について看護の専門に関連した明確な目的をもっていた(図3)。

外国語学校に通った経験のある者は20%で、留学希望の者より少なかった。学習した外国語は英語が89%で、圧倒的に多かった。英語の検定試験について受験経験をみると、80%が試験を受けていた。受験した種類は実用英語検定が94%であり、合格した級は、3級が31.2%、準2級が19.7%、2級が17.0%で、準1級以上の合格者はみられなかった。

3. 外国人との交流

現在、外国人と交流する機会は少なく、あると答えた者は25%にすぎなかった。交流する人は日本在住の外国人、留学生、海外の友人や知人、観光客などであった(図4)。また、話す言語は日本語が多かった。

4. 国際交流と海外の看護情勢への関心

「海外の看護事情についてその国の人から聞いてみたいか」という質問に対し、85%が「はい」と答え、関心が高かった。興味がある国はほとんどが米国とヨーロッパに集中していた(図5)。国際交流への関心を尋ねると、ほとんどの回答者が関心を持っていた。さらに「将来、

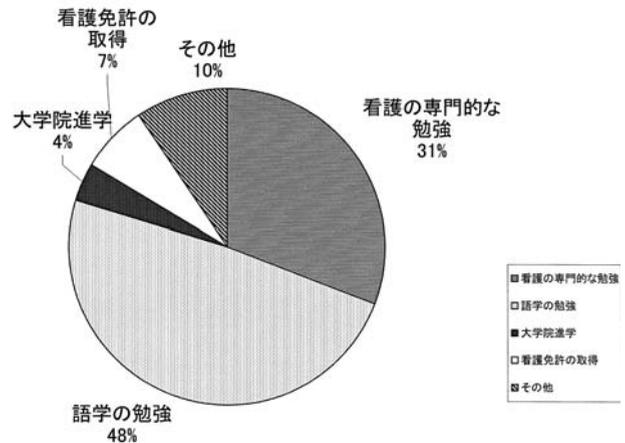


図3 留学したい目的

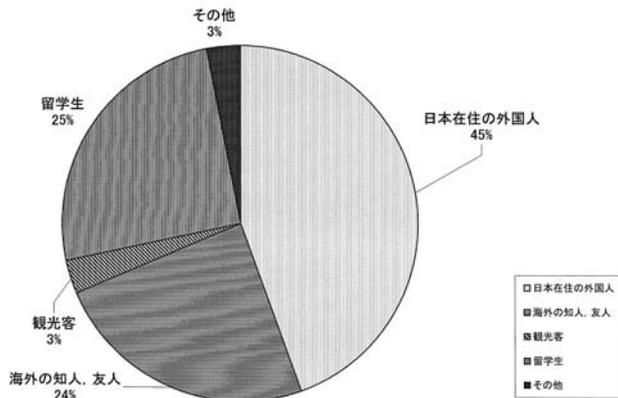


図4 交流している外国人

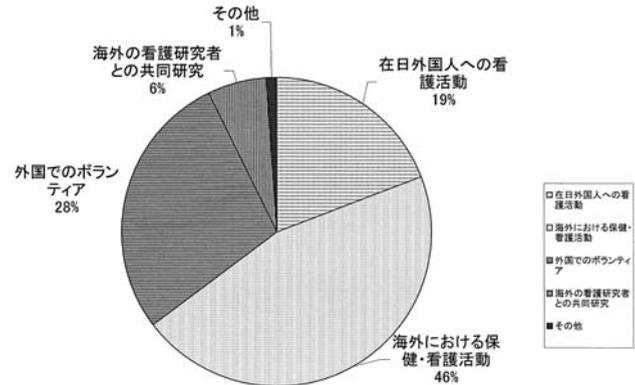


図6 将来希望する国際交流の内容

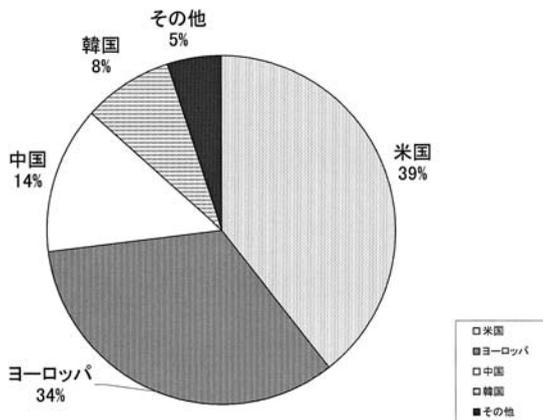


図5 看護の実情を知りたい国

看護職として国際交流をしたいか」という質問に対し、ほぼ半数が希望していた。その内容は、「海外における保健・看護活動」38.5%、「海外でのボランティア活動」が24.0%を占め、将来、看護活動のために海外に出かけていくことを視野に入れていた。また、国内における在日外国人の看護活動を希望する者も約1割を占めていた(図6)。

将来、看護に関する専門分野での英語の必要度をみると、「絶対必要」、「必要」が半数以上を占めていた。内容は、外国人患者とのコミュニケーション、外国人研究者とのコミュニケーション、英語の看護学・医学専門用語、英語論文の読解、学会での英語の口頭発表であった(図7)。英語の必要度は、コミュニケーションとして英会話ができることと、文献を読むための英語力が重要視されていた。

5. 大学における語学教育への希望

現在の英語の授業時間について、「増やしてほしい」と答えたのは、15%と、回答者の姿勢は消極的であった。また、現在、当大学で開講している英語と中国語以外に学びたい外国語の有無についての質問では、半数が学びたい外国語があると答えていた。ドイツ語を始め、フランス語、韓国語、スペイン語、イタリア語など多様な外国語があがっていた。学内の図書館で英語の本や雑誌を読んだ経験を尋ねると、18%が「読んだことがある」と答えていた。

6. 学生研修への関心

「当大学で実施されている米国ニューヨーク州立大学フレドニア校への学生研修を知っているか」という質問に対し、半数の者が「知っている」と答え、今後、参加したいと希望する者が1割を占めていた。また、希望する学生研修の形態を尋ねると、滞在期間は1ヶ月、費用は15万円から20万円以内、行き先はヨーロッパや米国、研修内容は現地の人や学生との交流、施設訪問、語学研修を希望していた(図8、図9、図10)。

7. 国際交流や外国人研究者招聘に関する大学への希望

国際交流や外国人研究者招聘について大学への希望を自由記載してもらった。143名の記載内容を分類すると、外国人研究者を学内に招いてほしい、国際交流の機会を作ってほしい、学内における外国人研究者の定置化、留学制度を作ってほしい、フレドニア校研修の詳細な情報を希望するといったことであった。また、外国人研究者や国際交流へ期待する理由としては、外国の医療や看護の状況を知る、異文化を知る、人材育成になる、多様な

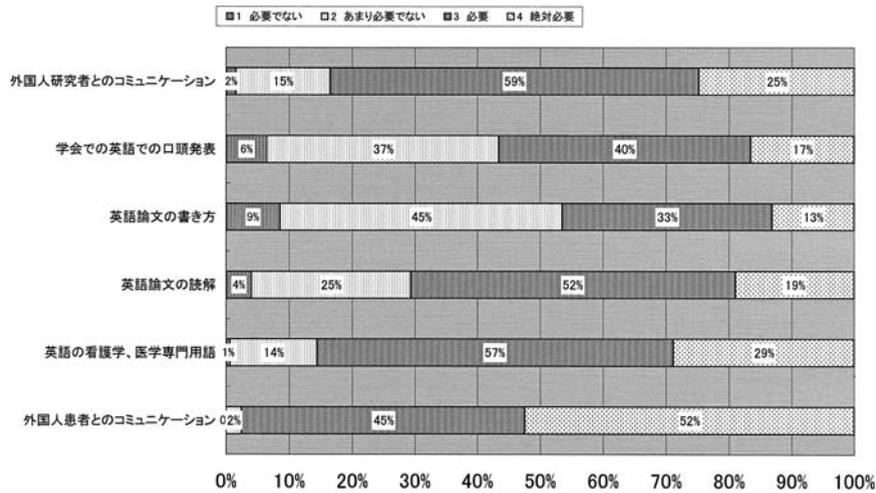


図7 看護における英語の必要度

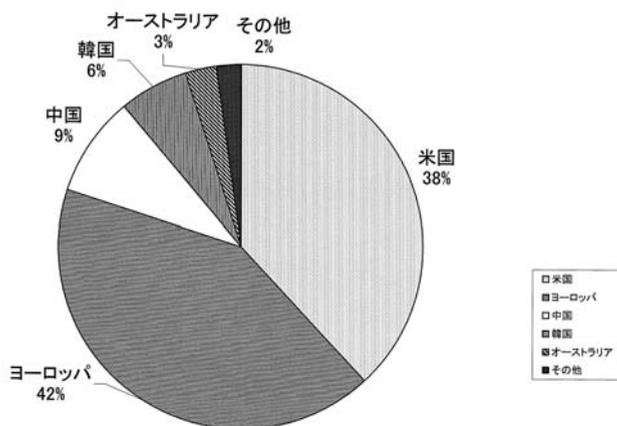


図8 学生研修を希望する国

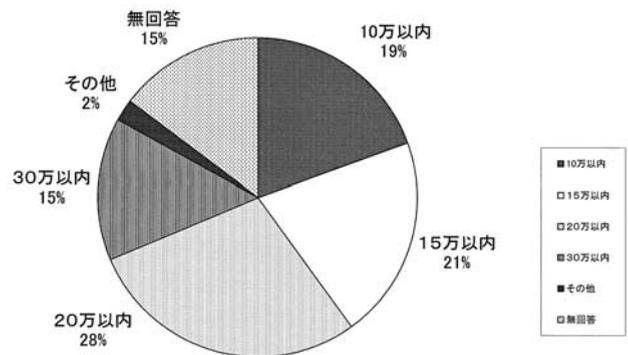


図10 希望する学生研修の費用

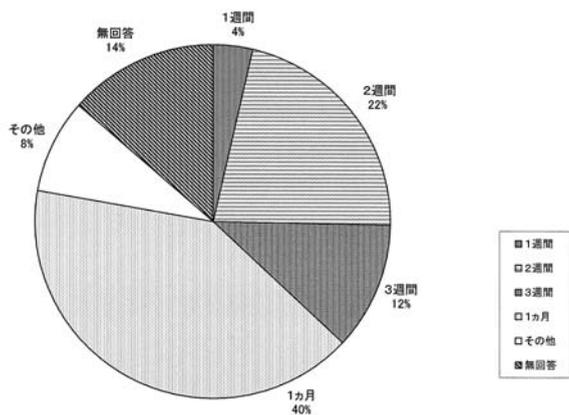


図9 希望する学生研修の日程

視点が持てて視野が広がる、外国の学生と交流するなどがあった。しかし、消極的な意見もみられ、コミュニケー

ションをとるのが大変、看護の勉強で余裕がないなど理由があがっていた。

考察

今回の調査結果で当看護大学学生には国際交流に関し、海外の看護事情に関心があること、外国語学習に関心があることの2つの特徴があり、将来へ向けて大きく国際交流の希望を持っていた。この特徴について考察するとともに、学生の希望を実現させる土台としての教育環境をどのように整えるのか、課題を提示したい。

まず、海外の看護事情へ関心があるという特徴について考えたい、これは、学生の半数近くに海外体験があり、留学を希望している学生も3割であったこと、さらに留学内容として看護の専門的な勉強と看護師免許の取得があげられていたこと、海外の看護事情をその国の人から

聞きたいと85%が希望していたこと、将来、看護職として国際交流をしたいと半数の者が希望していたという結果に表れていた。ここで注目されるのは、学生が海外の看護事情へ関心があると同時に、自身が将来、看護の専門職として海外で活動したい希望をもっていることである。

世界はインターネットでつながり、交通も発達し、国と国の交流を阻むものがないぐらいにボーダレスの時代にはいつている。人と人が接するのに国境はない。森尾らは、歯学部学生が将来、海外での歯科医療活動へ関心が高いことを指摘している⁴⁾。当大学の学生も将来の海外活動に少なからず関心を抱いていた。専門職として勉学するために入学してきた看護学生は、自分の専門を意識しながら将来の展望を持っていると考える。果たして、このような学生に教育の中でどう答えればよいのだろうか。堀内らが示している国際協力専門家としての能力が養えるような教育を実現することは重要である⁵⁾。また、昨今、多くの大学で用意されている国際保健・国際看護に関する科目を開講することも必要である⁶⁾。しかし、日常生活の中で外国人との交流も少ない当大学の学生には、まず、レディネスとして、外国の実状について情報提供できる機会を作ることが先決だろう。そのためには、学生の希望にもあがっていた外国人の研究者を学内に招く機会を多く作り、情報が直接得られるようにする必要があるだろう。また、国際保健や国際看護に関した科目を用意し、基本的な国際看護の理論と実践を組織的に教育する必要もあるだろう。このような教育的環境の実現には、全学的な協力が欠かせない。

次に外国語学習に関心があることについてである。これは、特に英語への関心とみてもよいだろう。80%が英語の検定試験の受験経験があり、英語検定の3級、準2級、2級といった合格級を取得していた。さらに、看護に関する専門分野での英語の必要度に関し、「絶対必要である」、「必要である」と回答した内容には、外国人とのコミュニケーション、外国人研究者とのコミュニケーション、英語の看護学・医学専門用語や英語論文の読解、学会での英語での口頭発表をあげていた。

このような結果は、学生の英語への関心は海外の看護への関心からくるものであるとも考えられる。すなわち、専門領域での国際交流に関心があるために、手段として英語力の習得を希望していると推測される。では、学生達の希望に応えるために、どのような教育の場を提供していけるのだろうか。田代は看護教員の立場から、4年

制看護基礎教育の中で、臨地コミュニケーションや看護ボランティアとしての英語基礎力が期待されると提案している⁷⁾。川越らは4年制大学看護系学部の英語教育実態調査の中で、海外渡航の機会を49.1%の大学が提供している事実をあげている⁸⁾。

本学ではこれまで学生研修を継続して5年になる。現地大学の学生と学生寮でルームメイトとしての共同生活体験、語学研修、施設訪問を実施してきた。研修に参加した学生が英語による実際的なコミュニケーション能力ばかりでなく、異文化理解など得るものは大きい⁹⁾。この研修を継続し、多くの学生が参加できるように、研修時期を見直していく必要があるだろう。また、研修を経験した学生達が英語学習にさらに意欲的に取り組めるように、大学として制度や環境を準備することも考えなければならない。現地大学とは平成16年3月に交流協定を結んでいる。今後、研修が単位習得につながれるようにするには大学間の調整が必要となるだろう。

今回の調査結果によると、多くの学生は学内の英語の授業時間を増やすことに消極的であった。英語への関心が高くても、実際の時間割の中で学習する意欲に結びついていなかった。4年間の看護教育は専門教科を中心とした過密カリキュラムであり、決して時間的なゆとりがあるとは言えない。学生が語学を学習したくても、時間的な制約があるため、英語学習の時間増に消極的になっているのかもしれない。また、語学学習には個人学習に多大な時間を要することをいかに学生に認識させるか、学習奨励の方法も再考すべきであろうと思われる。その上、学校教育において学生が希望する看護の専門性に活かされる英語の習得を実現するには、使える英語力、看護では特にコミュニケーション能力¹⁰⁾を獲得させることが重要である。ただ会話が通じればよいのではなく、習得した看護の専門知識を他者に伝え、他者の考えを理解していくコミュニケーション能力である。今後、学生が専門知識の習得と語学にかかる時間のバランスがとれるような環境が必要だろう。

結論

学生に対して国際交流に関する意識調査を実施した結果、以下のことが明らかになった。

1. 5割の学生が過去に海外体験をしたことがあり、さらに3割の学生が卒業後、語学習得や看護の専門的な勉強、看護師免許取得のために留学を希望していた。

2. 85%の学生が海外の看護事情に関心があり、その国の人から看護の実状について話を聞くことを希望していた。
3. 将来、看護職として国際交流をしたいと希望する学生が5割を占め、その活動内容は海外での保健・看護活動やボランティア活動などであった。
4. 80%の学生が英語の検定試験の受験経験があり、また、看護に関する英語の必要度としてコミュニケーションや専門用語を重視していた。
5. 学内に外国人研究者を招き、看護の情報を得たり、講義を受けることを希望していた。

おわりに

調査結果から、学生が国際交流と専門英語習得に関心をもっていることがわかった。このような学生の関心が持続し、将来、具体的な行動へ進むためには、いかに教育環境を準備するかが影響する。今後、学生の教育の一貫として、協定校を中心に真の国際交流の場を提供するために全学的な対応が必要であろう。

文 献

- 1) 澤田進編集：21世紀の看護教育. 35, 大学基準協会, 2002.
- 2) 北池正：日本の看護学教育における国際交流の実態と課題. *Quality Nursing*, 8(6), 4-8, 2002.
- 3) 千葉大学看護学部—アラバマ大学間の国際交流. *Quality Nursing*, 8(6), 17-21, 2002.
- 4) 森尾郁子他：国際交流に関する歯学部学生の意識調査. *日歯教誌*, 16(2), 13-17, 2001.
- 5) 堀内成子他：国際協力にむけての看護教育—国際看護コラボレータ育成. *看護教育*, 44(12), 1054-1059, 2003.
- 6) 竹内裕子他：看護基礎教育における国際保健・国際看護に関する教育—全国看護系大学のカリキュラム関連資料から—. *Quality Nursing*, 4(6), 59-65, 1998.
- 7) 田代順子：看護の高等教育化とグローバル化の中での英語教育への期待—看護教員の立場から—. *看護教育*, 44(12), 1087-1088, 2003.
- 8) 川越栄子：英語教育の実態調査の結果から. *看護教育*, 44(12), 1083-1084, 2003.
- 9) 濱畑章子他：看護学生の国際交流プログラム開発へ向けた活動と課題. *愛知県立看護大学紀要*, 9, 13-19, 2003.
- 10) 大関信子：国際化に対応する. *Quality Nursing*, 3(11), 65-73, 1997.